

氏 名 : 清水 稔
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 331 号
学位授与年月日 : 平成 31 年 3 月 15 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 音楽科における〈試行錯誤〉に基づく創作指導の理念
－「こと」と「もの」の関係性に着目して－
論文審査委員 : (主査) 教授 小川 昌文
(副査) 教授 鈴木 静哉 教授 山内 雅弘
教授 有元 典文 教授 中地 雅之

学位論文要旨

創作の領域は、学習指導要領に戦後になってから新しく加えられた領域である。しかし、その後、様々な創作指導における研究や実践が在りながらも、現在に至るまで実際の教育現場での創作の領域の扱いは決して多くはない。このような、実際の教育現場において創作の扱いが少ない要因の一つとして、指導者が「創作の意義」と「その本質的な機能」を正しく理解していないことが考えられる。学校教育において教師が、それらを正しく理解した上で創作の授業を構築していくことが、創作を効果的な学習の場にし、表現の一領域として機能させていくためには必要である。本研究は、そのための創作行為における〈試行錯誤〉の理論化であり、その理論をもとにした指導方法とカリキュラムをつくるための「創作指導の理念」の構築を目指すものである。

本論文は、問題とその背景 (序論)、基礎理論 (第 1, 2, 3, 4 章)、指導の実際と方法 (第 5, 6 章)、結論 (まとめ) の 4 部構成から成る。

序論では、研究の目的とその背景、及び研究の方法について述べた。第 1 章では、研究の方法の裏付けとして、我が国の学校教育における創作指導の問題点を、先行研究を基に明らかにすることで、本研究の社会的な意義を示し、具体的に本研究が明らかにしようとしている事柄を提示した。現在、創作をはじめ、音楽教育が作品を中心とする音楽観と、行為を中心とする音楽観によって対立的に捉えられているおり、それが、教師のスタンスに迷いを生じさせている。その問題を解決するためには、現象学的な視点から、音楽行為における主体と認識対象との関係性を明らかにする必要があることを論じるとともに、本研究の目的と構成を述べた。

第 2 章では、時間軸上における自己と音楽との関係性について述べている。本研究で明らかになったことは、自己の存在認識が、認識対象である他者と「つくりつくれる関係」で生じていることである。絶えず過ぎ去る時間軸上において、人の意識は、空間的な反復作用によって他者を認識し、鏡像的に自己を認識している。音楽を聴いているとき、人はその意識作用によって、過去を構造として想起し、未来を構造として予期することから、意識は音楽という構造に巻き込まれるような形になる。それによって、言葉の体系がもつ連続性から意識が離れて、音そのものから生じた「こと」を感じる「こと」の領域における〈私〉という自己存在の認識につな

がること、音楽の機能として明らかになった。

次に、第3章では、第2章の知見をもとにしながら、音楽と言語の相違性、音楽とイメージの相違性について述べた。イメージの体系は音楽とは異なる体系である。また、言語活動の体系も、音楽とは意味作用において異なる体系である。そのため、イメージや言語活動によって音楽が形成されていくのではなく、それらは〈きっかけ〉であり、「音楽そのもの」へと自己の意識作用が志向することが音楽行為では必要となる。第2章で述べるように、「こと」の領域における〈私〉の認識が音楽の機能の本質であって、そのときの〈私〉の欲求が満たされるためには、〈試行錯誤の技術〉が必要であり、その行為を成立させるための、音楽として形成するための〈技術〉が必要であることを論じた。

第4章では、それらの性質と関係性をもとに、音楽行為の意義について述べるとともに、本研究から導かれた音楽の〈技術〉の視点で、「音楽行為」(こと)と「作品や音楽体系」(もの)との関係性について定義をした。そこから、音楽教育における領域を音楽行為による自己認識の行為として一元的に捉え直す視点が導かれた。

次に第5章では、第1章から第4章までの知見をもとに、学校教育における創作指導を捉え直し〈試行錯誤〉の理論を提示した。創作は、〈私〉も知らなかった「音」や「音楽」という「もの」を形成して現前させることで、〈私〉も知らなかった〈私〉が求めている「こと」を見出す行為である。そのような共時的に生じている「こと」から新しい「もの」を生み出すには〈実感〉を伴いながら、「音」を見出していくことが必要である。それが音楽の〈試行錯誤〉である。そこから導かれる創作の指導理念は、創作指導には、自己を満足させることを目的に「音」を「音楽」へと構成することを学ぶ「創作行為そのものの指導体系」と、そのための〈試行錯誤の技術〉を創作活動によって学ぶ「技術の指導体系」の2つの体系と、それらの関連が必要だということである。

第6章は、学校教育における具体的な指導方法の提案と例示である。現場は様々な文脈に基づく固有性をもつ場であることから、理念をもとに方法を構築していくことが必要である。そのための〈きっかけ〉となる具体的な指導法と考察を、実際に指導をした事例や観察した事例をもとに行った。そこから、教師の関わりとして「音」を積極的に与えることが有効であると同時に、創造行為における〈私〉の満足、「音」との〈出会い〉が生じるためにはグループ活動が有効な手立てだということが明らかになった。

これらの研究結果をもとに得た知見を、第8章では結論としてまとめるとともに、創作指導において指導者が踏まえるべき事項と、今後の実践における本研究の理論の活用の仕方、今後の研究の方向性について述べている。